

観光サインの多言語化における言語間影響

——統語構造について——

松浦美佐子 黎曉妮 徐沈廷 全円子 湯文

1. はじめに

訪日外国人観光客の増加を受け、観光庁は「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」(2014)を策定し、観光サインのタイプとそれに対応する多言語化の基本方針を示した。また、「訪日外国人旅行者の国内における受入環境整備に関するアンケート」(2017)を実施し、「施設のスタッフとのコミュニケーションがとれない」、「多言語表示の少なさ、分かりにくさ」などコミュニケーションの問題の存在を明らかにした。この観光サインの分かりにくさの要因として、東京都歴史文化財団の「文化施設のための多言語対応ガイド」(2017)には、間違った外国語、専門性を欠く言葉遣い、外国人の興味や知識の違いに対する配慮のなさなどの問題が挙げられている。

さて、発表者は日本各地の観光地を訪れ、観光サインの事例を記録・収集し、多言語表記に見られる誤用傾向を分析した。言語教育学から中間言語の概念を援用し、多言語表記の誤用を中間言語、すなわち言語学習の過程で生起する学習者特有の言語知識の体系の一種ととらえ、それが生起する要因を言語間影響にあるとした。言語間影響とは、「ある言語の知識が、他の言語の知識や使用に与える影響」(Jarvis & Pavlenko 2007: 1)をいう。特に、発表では英語、中国語、韓国語の観光サインにおける誤りの統語的特徴に焦点を当て、日本語とそれぞれの言語との言語間影響の視点から分析した。以下で紹介する事例は、発表者が実際に収集した事例の一部で、下線は筆者による。また、事例に続く括弧にその事例採取地を示す。

2. 日本語と英語の言語間影響

観光サインの多言語表記の基本は日本語・英語の二か国語である。使用頻度が高いだけに多くの誤用が見られる。以下では、特に、日本語と英語の統語構造の違いから生じた誤りに注目する。

2.1 日本語にない品詞：冠詞と関係詞

冠詞は英語で最も使用頻度の高い語だが、冠詞を持たない言語を母語とする者の誤用は消滅しにくいといわれ、中間言語分析で指摘される冠詞の誤用パターン(水野 2000: 51-74)は、実際全て観光サインの多言語表記にも出現している。定冠詞と不定冠詞を取り違えるエラー(Click the language bar on a screen, 東京都: ホテル)、不要な所に使用する濫用(the children under 5 free, 京都市: 寺院)、必要な所がない忘却エラー(please choose one drink from next page, 岡山市: カフェ)、また、共起エラー(Please have a your seat, 廿日市市: カフェ)である。

冠詞と同様に、関係詞も日本語にはない。そのため関係詞の前後の意味関係が不明確であるとか間違っている事例が多数見られる: shrimp chip[s] that printed Inujima original pictures (岡山市: 売店)。特に、関係節に含まれる受動態でbe動詞を使用しないなどの誤りが頻出する: hand-made udon that cooked without cutting (岡山市: 飲食店) / the long-standing company which established since 1906 (広島市: 飲食店)。

2.2 単数・複数の形態と数の不一致

日本語は単数と複数の区別をその形態に反映させない。そのため、単数形と複数形の混乱した事例は多い: Drink (岡山市: 飲食店) / Attentions! (岡山市: 史跡; 高松市: 駅)。特に、単数と複数で意味が異なる場合には注意が必要である: open hour (岡山市: 雑貨店) / Matcha Green Tea with small sweet (京都市: 飲食店)。また、単数と複数の混乱から、主語と動詞、名詞と数詞や指示詞の間に数の不一致が生じる: Woman who hold a black cat (岡山市: 美術館) / 1 sticks (京都市: 屋台) / please use this slippers (京都市東山区: 寺院)。

2.3 逐語訳

翻訳ソフトの使用か「寝たばこ」(sleeping cigarettes, 鏡野町: 旅館)、「白玉」white ball (広島市: 飲食店)など、日本語の単語を英語に置き換えただけの逐語訳による誤りも目立つ。特に丁寧表現で、主客が逆転する誤りが多い。例えば、「配送承ります」“I will receive the delivery” (広島市: 売店)では「受ける」の謙譲語「承る」の直訳“receive”によって発送側と受取側が逆転している。

2.3.1 修飾語の語順

英語には名詞句の主要語と修飾語句との関係に共起制限や語順の階層性がある。一方、日本語の修飾語句に語順の制約はないので、小宮(2010: 178-79)は日本語話者が“an American I've been looking for car”という表現を

使用しても不思議はないと述べる。実際、「Fish soup and seaweed soup cooked vegetable[s]」(京都市：飲食店)のように「魚出汁と昆布出汁で炊いた野菜」という日本語の語順がそのまま保持された事例が散見される。

2.3.2 主語優位言語と主題優位言語

日本語は主題優位言語で「主題・陳述」関係が、英語は主語優位言語で「主語・述語」関係が重視される(小宮174-76)。このため主語ではなく、主題が文頭に来た英訳が多数出現している：The highway buses board here(高松市：高速バス乗り場)、Fee please put in this box(京都市：神社)。

3. 日本語と中国語の言語間影響

英語に続いて多く見られるのは中国語の多言語サインである。しかし、日本語と中国語の統語構造は大きく異なる。これは、日本語は膠着語で、語の順序や語形変化でなく助詞・助動詞などの付属語によって文法的機能を示す一方、中国語は孤立語で、それぞれ独立して完結した意味を持つ単語を重ね、その関係を語順で示す言語であるためである。この違いが観光サインの翻訳でも誤りを生じさせる原因となる。

3.1 日本語の格助詞「の」と中国語の構造助詞“的”

日本語で名詞が名詞を修飾する時に用いられる「の」は中国語では構造助詞“的”となる。しかし、日本語の「の」が全て“的”に相当するとは限らない。修飾語の名詞と中心語の名詞が緊密に結びつき既に1つの名詞となっている場合には“的”は不要である。例えば、「雨の日」は中国語では“雨天”であるので“雨の日”(倉敷市：土産物店)とする翻訳は誤りである。

名詞を修飾する形容詞にも構造助詞“的”を付けて連体修飾語を作る。「おいしいメロンパン」「好吃甜瓜面包」(東京都：土産物店)という事例があるが、これには“的”を付けて“好吃的甜瓜面包”とするのが正しい。ただし、形容詞が単音節である場合は“的”を付けない。例えば、「新しい味わい」の「新しい」は中国語では単音節形容詞“新”であるので“新的味”(倉敷市：土産物店)ではない。これは“新口味”と訂正すべきである。

3.2 日本語の格助詞「へ」「に」と中国語の介詞(前置詞)“向”

日本語は、格助詞「へ」で移動動詞の方向を、格助詞「に」で移動動詞の帰着点を表すが、「へ」と「に」は交換可能である。一方、中国語では、介詞(前置詞)“向”を名詞の前に置き、移動動詞の方向を表すが、帰着点の意味はない。倉敷市内路上に設置された「ようこそ倉敷へ」では、観光客は既に倉敷に来ているのであるから、「へ」は方向ではなく帰着点を指す。しかし、これの中国語翻訳は“欢迎向仓敷市”(倉敷市：路上)のように“向”を使用している。正しくは“欢迎来到仓敷市”となる。

3.3 日本語の継続相「ている」と中国語のアスペクト助詞“着”及び副詞“在”

中国語ではアスペクト助詞“着”は動詞の直後に置かれ、動きのない状態の持続を表すが、副詞“在”は動詞の前に置かれ、動きのある動作の進行を表す。例えば、「ただいま清掃中です」は“清掃”という動作の進行を表すが、これを中国語にした“清扫着”(JR西日本：ホーム)では状態の持続を表す“着”を使用している。正しくは“正在清扫”となる。

3.4 日本語の主語の省略

日本語では主語が省略されても、敬語の体系、感情や感覚を表す動詞・形容詞の主語の人称制限、授受を表す動詞の人称による違いなどで誰が主語が明らかである。一方、中国語では主語の省略は稀である。新幹線車内に「こちらに荷物を置かれた場合には、乗務員が通りました際にお知らせください」という表記がある。日本語では主語を省略しても尊敬語「置かれた」で客への注意書きであることは明らかである。しかし、中国語では“此处若放置有行李”のように「置かれる」は、尊敬語ではなく受け身に訳されている。これでは「ここに置かれている荷物」を意味するため、中国語圏からの観光客は「荷物を置くのは禁止」と誤解するかもしれない。

4. 日本語と韓国語の言語間影響

韓国語の観光サインは、英語や中国語に比べ設置場所や設置施設が限られている。また、日本語と韓国語の統語構造は似通っているため、誤りも少ないと予測されたが、以下のような違いが見られた。

4.1 韓国語の分かち書き

ハングル表記には日本語のような仮名と漢字の区別や読点(,)がなく、意味の区切りは分かち書きで示す。そのため、分かち書きの位置を違えると意味が変化する。例えば、「後楽園のチケットをご提示ください」を「後楽園 “나중에 낙원티켓”(岡山市：史跡)とすると「後で楽園チケット」となる。また、靴を入れる袋「靴袋」は一つの名詞であるから“신발가방”とすべきだが、「靴」と「袋」を分かち書きにして“신발 가방”(岡山市：史跡)と表記すると「靴とカバン」の意味に変化する。

4.2 韓国語の格助詞「の」の省略

韓国語では日本語ほど格助詞の「の」を用いない。位置、材料、所有関係を示す「の」は省略される。しかし、採取事例では日本語の直訳かいずれも「の」が入っていた。例えば、「庁舎の南側」は“청사의 남쪽”（岡山市：路上）ではなく“청사 남쪽”となる。また、「桃のデザート」は“복숭아의 디저트”（倉敷市：土産物店）ではなく“복숭아디저트”に、「舟和の芋パフェ」（東京都：菓子店）は“후나와의 고구마파르페”ではなく“후나와 고구마파르페”である。

4.3 日本語の格助詞で終わる文構造

日本語では「ようこそ倉敷へ」のように格助詞で終わる表現も多い。しかし、韓国語では書き言葉ではこの構造は用いない。であるから、これを直訳した“어서오세요 쿠라시키에”（倉敷市：路上）は誤りである。同様に、「に」や「で」で終わる表現も不自然である。「お忘れずに」“잊으시지 않도록”（岡山市：史跡）、「（通話）は 玄関エントランスで」“현관에서”（岡山市：図書館）などは、これに「お願いします」の意味の韓国語表記を付加すべきである。

5. おわりに

多言語表記の分析を通して、翻訳を専門としない者による翻訳や翻訳ソフトによる翻訳の誤りを訂正しないまま利用することで、特に民間が運営管理する施設において多数の誤りが生起する現状が明らかとなった。誤用の回避にはネイティブチェックを受けることが肝心だが、ネイティブの助けを得られない場合、翻訳担当者が翻訳時に頻出する誤用傾向を意識しておくことで誤用を回避する一助になると考える。

本発表では観光ビジネスを対象として研究を進めたが、観光サインの言語間影響の傾向や誤用分析は言語教育にも応用可能であろう。多言語表記の誤用傾向を認識することは、英語、中国語、韓国語を学ぶ日本語話者に生じがちな誤用傾向を予測することを可能にする。また、観光サインに着目することで、教室内から地域社会へと言語学習の場を広げることが可能になる。

謝辞：本研究は文部科学省・平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業、岡山商科大学「『寄り添い型研究』による地域価値の向上」の一部門「岡山市におけるコミュニケーション支援及び言語のバリアフリー化」として実施した。

参考文献

- 相原茂、曹泰和、顧令儀、今井俊彦、加藤晴子、三宅登之、張勤(2018)『中国語と日本語』日本語ライブラリー。
- 李姫子、李鐘禧(2010)『韓国語文法 語尾・助詞辞典』スリーエーネットワーク
- 李勇九、生越直樹、姜英淑、金智賢、石賢敬、塚本秀樹、永原歩、吉本一(2014)『韓国語と日本語』日本語ライブラリー。
- 本田弘之、岩田一成、倉林秀男(2017)『街の公共サインを点検する 外国人にはどう見えるか』大修館書店。
- Jarvis, Scott and Aneta Pavlenko (2007). *Crosslinguistic Influence in Language and Cognition*. New York: Routledge.
- 金亨哲、鍵本有理(2001)「韓国の日本語学習者に見られる誤用例の分析」奈良工業高等専門学校研究紀要第 37 号,137-138.
- 国土交通省観光庁 (2014)「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」
- 国土交通省観光庁 (2017)「訪日外国人旅行者の国内における受入環境整備に関するアンケート」
- 小宮富子(2010)「日本の文化と日本人の英語」塩澤正、吉川寛、石川有香編『英語教育学体系第 3 巻 英語教育と文化 異文化間コミュニケーション能力の養成』大修館書店。
- 水野光晴 (2000)『中間言語分析—英語冠詞習得の軌跡』開拓社。
- Selinker, L. (1972) 'Interlanguage.' *Applied Linguistics* 10:3, 209-231.
- 東京都歴史文化財団 (2017)「文化施設のための多言語対応ガイド」